

01

市川 智子さん

オーストラリア大使館主席商務官



<プロフィール>

オーストラリア大使館主席商務官。大学時代にオーストラリアに留学し、大きな刺激を受け、その後、再びオーストラリアに戻り、大学院に進む。卒業後、教育系企業を経て、現職に就く。現在、大使館の留学推進の中核として各方面で活躍中。

「オーストラリアと日本の懸け橋になりたい」と思って3度目の正直

—— 市川さんは商務官として、どのように留学に携わっているのでしょうか。

市川： 商務官とは大使館で貿易投資を促進する役割を持っています。私の場合は教育分野を担当しており、簡単に言うとオーストラリアへの留学をPRする仕事です。オーストラリアにとって教育は第4番目の輸出産業で、サービス産業に限って言えば最大の輸出産業となります。具体的には、日本の皆さんにオーストラリアの魅力を知っていただき、促進、サポートするというものです。留学フェアの開催や、学校に足を運んでの研修も行います。最近は英検とタイアップして、留学事業を促進しています。

—— 大使館で勤めるにあたって、最初から留学業務に関わりたと思っていたのでしょうか。

市川： はい。自分自身がオーストラリアのアデレードに留学していたこともあり、最初から「オーストラリアと日本の懸け橋になりたい」、そして「教育に関わりたい」と言うことは決めていました。The Japan Timesの月曜日版に外資系の求人が出ていたので、週の初めは決まってThe Japan Timesを買っていました。実は採用に至る前に2回応募して、落ちています。3度目の正直ということでしょうか。ここまで働いてきて、この仕事は私にとって天職で、本当に毎日楽しく仕事しています。



アデレードで「人生いろいろでいいんだ」という衝撃を受けました

—— 市川さんは学生時代にオーストラリアに留学されていたということですが、そのアデレードを選んだきっかけや動機は何だったのでしょうか。

市川： これには確固たる理由があるんですね。私は大学の交換留学制度でオーストラリアに行ったんですが、私は幼少期にアメリカにいたので、アメリカ以外の英語圏に行ってみたいと思っていました。大学の提携校にはイギリスの大学もあったのですが、学期の関係で、オーストラリアなら留学してもそのまま4年間で大学を卒業できる可能性があったのです。もう1つのポイントは、私の大学の専攻は国際政策だったのですが、第二外国語の選択でインドネシア語を履修したことです。そこで東南アジアに興味を沸かし、地理的な関係から東南アジア関係の学問も多くあるという話を聞き、オーストラリアに絞ったのです。

—— アデレードでの留学経験はいかがでしたか。

市川： 親元を離れての海外は初めてだったので、まず全てが新鮮でした。アデレードはコンパクトな街で、ローカルのコミュニティに溶け込みやすいという感じがありました。市内は端から端まで歩いて20分。あの狭さが初めて海外を知るには馴染みやすく、心地よかったですね。私はすっかりアデレードに惚れてしまいました。その後、大学院に進んだのですが、専攻の関係で泣く泣くアデレードを離れてしまいましたが、もはやオーストラリア以外の進学先は頭にありませんでした。

—— アデレードでの1年間は大きな分岐点だったわけですね。

市川： この1年間に私にあまりにも強烈な衝撃を与えてしまったがために、すっかり就職という選択肢すら頭からなくなってしまいました。周囲が就職活動を進める中、若さゆえの衝動と情熱で、「1日も早くオーストラリアに戻りたい」と思うようになりました。もっと勉強を深めたいという思いと重なって、半年間のギャップをワーキングホリデーで埋め、大学院に進むことになったのです。



—— そこまで人生を変えることになった、一番の衝撃って何だったんですか。

市川： 「人って、人生って色々でいいんだ」という衝撃ですね。4人に1人が移民で、5人に1人が留学生という国にあって、「決まったルールを踏まなくていい」という価値観が新鮮でした。しかも、オーストラリアは生涯学習が根付いているので、社会人を経験して

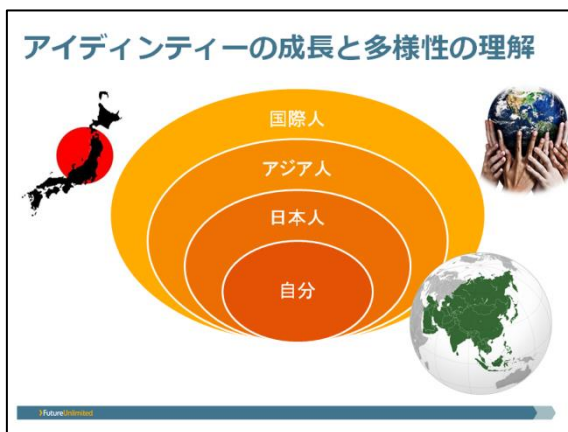
から留学してきた人、子育てを終えてから大学に戻ってきた人、、、そういう人たちに囲まれていたんです。「大学を変えてもいい、入り直してもいい、人生は自由に主体的に選択できるんだ」と思わせてくれたのです。留学前の私は「大学卒業して就職する」という道だけを当たり前のように考えてきて、留学を糧に就職しようということしか考えてないわけですよ。アデレードでの1年間でその価値観がガラッと変わってしまったんです。

オーストラリアで育てるアジア人としてのアイデンティティ

—— 留学先にオーストラリアを勧めするアピールポイントは何でしょうか。

市川： まずはオーストラリアが日本に関心が強いということです。それは日本語プログラムを持った学校が多いことにも表れています。特に中高生ぐらいでは、相手との共通項がないとなかなか話せず、関係も築けないということがありますが、そういう点では、日本人であること自体が共通項になりえます。

次に、アジアが非常に近いということが大きな意味を持ってきます。私自身が留学して感じたことですが、日本人のアイデンティティというのは、日本にいても持っているし、外国に出れば、どこであってもしっかり感じるようになります。その先に、国際人という大きなアイデンティティもあり、それもグローバル時代の中で意識が高まってきました。しかし、日本人と国際人の間にある「アジア人」というアイデンティティは感じづらいですね。海外に出ると、日本人であるということの前に、「アジア人」というカテゴリーで見られます。海外の人たちの目には、中国、韓国、インドネシアなどと同じ「アジア人」として映るわけです。私にとってそれは衝撃的な気づきでした。日本は経済大国



だということもあり、良くも悪くも、「他のアジア諸国とは違う」という価値観を持ちがちです。語弊を恐れず言えば、他のアジア諸国を下に見がちで、イコールと思っている日本人はあまりいないのではないのでしょうか。しかし、非アジアの人たちは、日本人とその他アジア人との共通項を私たち以上に感じており、見つけるのです。

私はこの衝撃をオーストラリアで感じました。オーストラリアは移民、留学生が全体の2割を占めるという国だということは先にお話ししましたが、その多くはアジア人です。その環境の中で、必然的にアジアに親しみを持つことができますし、それを若いうちに肌で感じるのがどれだけその後の人生の糧になるかは言うまでもありません。また、オーストラリアはそれだけ移民が多くいるので、現地の人でも完ぺきな英語を求めています。

せん。英語に自信がなくても、温かく見守ってくれますし、「私も来たときはそんなに英語できていなかったし」といった同級生たちが優しく助けてくれます。

あとは、学期システムが、夏を使ってターム留学をするという生徒にはうってつけですよ。その利点は外せません。

おそらく、教育内容や質に関しては、アクティブラーニングとか、自分の主張をが求められるとか、欧米はみんなそうなので、アメリカ、イギリス、オーストラリア、そこまで大差ないと思います。そこであえて競争する必要はないと思いますが、それ以外の部分で、特に中高生にとっては、これだけ留学をしやすい国はないと感じています。

学校の先生が留学に興味を持ち、語ってほしいですね。

—— 市川さんから見て、中高で留学する意義は何でしょうか。

市川： 大学生の私ですら大きな衝撃を受けたわけですから、中高生にとっては、留学は言葉にできないほどのインパクトを与えてくれると思います。また、中高生の場合には、その後、大学で別の国に行ってみたり、さらに幅を広げることもできますよね。若くして行けば行くほど、2つ目、3つ目とさらなる一歩を踏み出すチャンスが広がります。

—— 今の中高生、大学生の留学に対する留学の姿勢や意欲というのはどうとらえますか。

市川： 二極化していますよね。本当に留学したい生徒たちは誰が何を言おうと行くわけですよ。でもそれは全体からすると少数です。圧倒的多数は、「行きたい」という夢はあるんだけど、就職や成績、お金といった現実的な心配があるという人たちではないでしょうか。内向きなのではなく、関心はあるけど、実際に行動に移せず、具体的に動けないうちに時間だけが過ぎ、タイミングを逃してしまう、ということが多くあります。この潜在層を引き上げることが留学促進の課題ですし、学校もうまく関わってほしいと思います。まだこれからも留学のニーズは高まっていくと思っていますよ。



オーストラリア大使館の皆さん

—— 特に中高生の留学意欲を高めるには、どういうことが必要だと感じていますか。

市川： 中高生については、学校の先生との距離が近い分、やはり教員の留学に対する意識や理解が高まることを期待しています。保護者についても、自分で情報を集める人もいますが、「まだ留学についてよく分からない」という方が大多数だと思います。その保護者に

とって一番大きな情報源はやはり学校の先生です。そこで留学の芽を育ててくれる先生に直面しているかどうかによって、その生徒が留学できるかどうか左右されてしまうという側面もあるかと思います。

—— 教員が留学促進のカギを握っているということですね。

市川： 先生方の存在が重要だということ、強く思いますね。送り出しについては難しくても、せめて留学から学校に戻ってからのサポートは積極的に取り組んでいただければと思っています。また中高の場合は学校の制度、学則などが留学の障害になることがあります。大学レベルは留学の制度化もどんどん進み、提携校も充実してきており、多くの留学生が学校のシステムの中で留学するようになりました。しかし、中高については、留学が増えてきたとはいえ、まだまだ留学のインフラ整備という意味では発展途上です。教員の意識改革と合わせて今後の課題になっていくことでしょう。

—— 学校、教員に具体的に求めることはなんでしょう。

市川： 留学フェアやガイダンスについて生徒の皆さんに声をかけていただくことをまずお願いできればと思います。本来なら私たちが全ての学校に出向いて生徒の皆さんに声をかけたいのですが、何百人もの生徒さんを一人ひとりお相手することはできません。でも、先生方 1 人なら色々な話もできますし、関係も築けます。私たちも先生方が参加できる勉強会を設定するなどして、先生方とつながりを作りたいと思っています。そして、ぜひ、生徒さんに簡単な声掛けからお願いできればと思います。高校 1 年生ぐらいから留学フェアに参加してくれる生徒が増えると理想だと思いますし、そこに先生方も来ていただければありがたいですね。留学フェアに来ればいろいろ刺激も受けますし、まずその雰囲気を感じてほしいと期待しています。



教育セミナーで話をする市川さん
(実はこの中に MAX もいます)

—— 中高の英語教育についてはどう期待しますか。

コミュニカティブだ、アクティブラーニングだ、と言いながらも、授業でやっていることは和訳だったり、文法だったり、私たちが学生のころと変わっていない部分が多くあります。しかし、今、大学の英語科教員免許の過程も統一化され、見直しがなされています。その中で、未来の教員の卵である大学生にはぜひ留学をしてほしいと感じています。そうすれば、入試改革とか指導要領の改定とか関係なしに、教師と生徒との関わりの中で、教育が変わっていくのではないのでしょうか。加えて、ぜひ先生方から生徒に留学や海外の話をも身近なものとして語り、刺激を与えていただければと思います。

オーストラリアの大学に行きたいという生徒を増やしたいですね。

—— オーストラリアの大学への進学はまだ数が少ないですね。その点はどうかとらえていますか。

市川： 確かに、オーストラリアの大学の魅力、強みがまだ理解されていないという感覚はあります。オーストラリアの大学は数が少ないにもかかわらず、大学ランキングで上位に入る学校が多くあります。しかし、残念ながら、その事実すらまだ認識してもらっていない状況がありますよね。昔ながらの「海外大学ならアメリカ、イギリス」という考え方がまだ強くて、その壁も感じています。また、大きな問題として、オーストラリアは物価も学費も高くなっています。今は、「質が高い大学に行きたいからオーストラリアに行く」という意識にシフトしていかなくてはいけません。またそのイメージがついてきてないと思います。今後、色々な取り組みの中で、オーストラリアの大学に進学したいという生徒を増やしていきたいですね。

—— オーストラリアの大学も留学生を求めていると思いますが、今や中国を中心とした他のアジアが注目を集まる中、日本自体はマーケットになりうるのでしょうか。

日本のマーケットは重要視しています。それは大学がダイバーシティを求めているからで、一定数日本人にも入学してほしいと思っています。中国人は多いですが、大部分がビジネス学部を希望します。一方、日本人は多様な分野に興味を持っていますし、大学レベルでは共同リサーチをするパートナーにもなっています。そういう意味で、もっと日本と親交を深めたいと考え、日本人の学生を求めているというのは言えます。

最近では、日本も海外進学に力を入れる学校が増えてきた、IBを導入する学校が増えている、など、グローバル化のニュースがオーストラリアにも届いており、オーストラリアの大学も日本に対する興味、関心をより高めています。その中で、優秀な生徒にはファンデーションなしでの入学を認めていこうという議論も少なからず起きています。

留学経験は財産です。長い目で人生の豊かさが変わります。

—— 未来を支える生徒たちに、どのような「グローバル人材」になってほしいと期待していますか。

市川： 一つは、グローバルという広い世界でみるのではなく、アジアの意識、感覚を身に付けることでしょう。特に企業で一番求められているのはその感覚を持っている人でしょう。日本で言う「グローバル」は決して「全世界」ではなく、日本が最も広くつながり、協働していかなくてはならないアジア圏なのです。その意識を高める経験をぜひ求めてほしいと思います。

また、色々な国に詳しいということよりも、まず、日本という国と日本文化や社会を知り、日本人としての自分自身と価値観を養っていくことが大切です。グローバル人材を育てると言っても、圧倒的多数のグローバル人材は日本で働くことになります。必要なのは日本をよく理解するということ、そしてその他の文化背景を持つ人を受け入れていくキャパシティーです。多数外国がある中で全てを理解することは不可能です。どんな人に対しても「価値観が違って当たり前、考え方が違って当たり前」と思えることです。むしろ「当たり前のことは何もなし」というとらえ方を自然とできることが重要ですね。

そして、その中で話す言語はどこにいても英語が中心です。しかし、その英語は完璧で流ちょうである必要はなく、度胸を持って意思が伝えられるのであれば十分です。それよりも肌感覚で色々な人と付き合えるという力、そしてその経験を持った人が一番強いグローバル人材になれるのではないのでしょうか。だからこそ、若いうちに海外を経験してほしいと願っています。

——— 最後に、留学を考えている生徒に一言メッセージをお願いいたします。

留学をすることのデメリットは長い目で見てゼロだと思っています。しかし、しないことのデメリットは圧倒的に大きいです。目の前のことを考えると、いくらでもデメリットは出てきそうですが、長いスパンで見ると、留学をしたかそうでないかは人生の豊かさという点で変わってきます。どこに留学するかは大きな差ではないけど、留学するかしないかは大きな差です。ぜひ若いうちに日本を出て海外に触れてほしいです。それは掛け替えのない財産となるはずですよ。

編集後記

インタビュー第1弾として、長年一緒にお仕事をさせていただいている市川さんをお願いをしました。オーストラリア、そして留学に対する情熱がバンバン感じられ、あっという間の1時間でした。特に、印象的だったのは、アジア人としてのアイデンティティという話です。確かに、あまり「アジア人」という意識ってなかなか持ちづらいですが、21世紀型のグローバル人材として、重要な要素ですよ。また、最後に、留学するかしないかは人生の財産として大きな差があるといったことも共感いたしました。市川さん、どうもありがとうございました。

